『個人的な体験』論

――多元的宇宙の創出――

岩田英作

一

多元的宇宙とは、大江健三郎の『個人的な体験』（一九六四年八月）に登場する火見子によって語られた言葉である。従来の研究において、この多元的宇宙については、ほとんど顧みられることがなかった。しかしながら、栗坪良樹（注一）・上田正行（注二）の両氏も指摘しているように、多元的宇宙の担う意味は、検討に値するだけの価値を、充分有している。なぜなら、『個人的な体験』そのものが、まさしく火見子のいう多元的宇宙として、創り出されているからである。本稿では、そのことを明らかにしたいと考えているが、その手続きとして、鳥（バード）が子供を引き受け、育ててゆく決意をするに到るまでの過程を、綿密に検討する必要がある。そして、その過程の鳥（バード）は、火見子とのかかわりにおいて描かれており、よって過程の考察は、両者の関係を中心になされなくてはなるまい。火見子のほかにも、デルチェフさんや菊比古など、鳥（バード）の転換に影響を及ぼした人物はいるものの、それらは、火見子に比べ、作品の周縁に位置する人物なので、それらについては、注に記すにとどめる（注三）。

さて、鳥（バード）と火見子に関して、松原新一は、鳥（バード）を「一個の社会人としての『正常』の道に立つ」「帰結にいたらしめたものこそ、実は火見子の《愛》にほかならなかった」とする（注四）。また、片岡啓治は、鳥（バード）は火見子と関わることで、「生ま身の人間との、具体的な現実世界とのむすびつき」を持ち得、それが「現実をひきうけること」を、すなわち父親として子供を引き受けることを導くとする（注五）。いずれも第七章の、鳥（バード）の性的恐怖心が火見子の献身的な行為によって払拭される場面を、鳥（バード）の転換に直結させた解釈である。

両氏の解釈に従えば、火見子は、鳥（バード）の転換に肯定的にのみ働き掛ける一義的な存在と受け取れる。しかし、それで終わってしまっては、火見子の全体像を把握したことにはならない。つぎに記すような火見子像が、隠蔽されたままだからである。

それまで受け身に徹していた火見子は、アフリカに熱情を感じ始めるや、にわかに能動的に振る舞うようになる。鳥（バード）の子供を、火見子の知り合いの医者に殺してもらう計画は、火見子みずから用意しておいたものである。また、子供殺害後のアフリカ行も、火見子が立案し、鳥（バード）を誘ったのである。こうした火見子の行為は、鳥（バード）と子供を、むしろ遠ざける方向に作用するものといわなくてはなるまい。

火見子が鳥の転換に及ぼす影響は、けっして一面的に捉えうるようなものではない。本稿では、まず、そのことを念頭において両者の距離を測定してゆきたい。

二

子供が誕生する以前の鳥について、簡潔にその特徴を記すなら、つぎの二つの点を指摘できる。一つには、鳥が鳥自身の生活に「何か欠けるものと根源的な不満」を感じている点であり、もう一つには、アフリカを旅し、冒険記を出版することを夢見ている点である。この両者の関係は、第二章の冒頭に置かれた鳥の夢の中に、端的に表われている。

≪鳥は、ニジェールの東、チャド湖西岸の高原に立っている。かれはそこでいったいなにを待機していたというのだろう。鳥は、たちまち大きいファコヘールに見つけられてしまう。凶暴な獣は砂を蹴って突進してくる。それは決して悪くない。鳥は冒険や死の危険や新しい種族との出会いをつうじて現在の安穏で慢性的に欲求不満な日常生活の彼方にあるものを、かいま見るためにアフリカへ出発したのだから。≫

つまり、アフリカは、日常生活における不満を解消しうる場として想定されており、その意味で、日常生活とアフリカは、対極の位置関係にあるといえる。

とはいえ、ここでのアフリカは、一般的な意味でのユートピアとは異質なものであろう。アフリカの地で「凶暴な獣」に襲われることを、「決して悪くない」と考える鳥は、「安全」であることよりも、むしろ「危険」に身を晒すことの方を望んでいる。もっと具体的にいえば、第一章の終末、若者達との格闘の際に得られた「闘争の喜び」を、現在の鳥は必要としている。この格闘と、アフリカに鳥が夢見ているものとの類似は、格闘直後に見た蒸気機関車が、鳥の目には「巨大な黒犀」と映っていることからも理解されよう。

以上、子供誕生以前の日常とアフリカの関係を確認したうえで、つぎに、鳥にとっての子供の意味について考察する。

前述の夢の中で、鳥を襲った獣の名は「ファコヘール」（Phacochoerus…ラテン語）といい、それは、「イボイノシシ」の意である。そして、その「イボ」は、鳥の子供の、頭蓋骨のディフェクトから突き出した瘤を思い起こさせる。それとともに、夢の中で、「ファコヘールの凶まがしい歯が鳥の踝を鋭く確実にとらえる」のと同時に、現実では、「電話のベルが鳴りつづけて」おり、その電話は子供の誕生を告げ知らせるものであったことも考え合わせられる。つまり、アフリカで鳥を襲ったファコヘールは、障害を持った子供のメタファーとして機能している。

鳥の子供の障害は、ファコヘールのみならず、アフリカそのものとも重ねられている。それは、作品の冒頭、鳥が書店に置いてあるアフリカ地図を眺めた際の描写に見られる。

≪アフリカ大陸は、うつむいた男の頭蓋骨の形に似ている。この大頭の男は、コアラとカモノハシとカンガルーの土地オーストラリアを、憂わしげな伏眼で見ている。地図の下の隅の人口分布を示す小さなアフリカは腐蝕しはじめている死んだ頭に似ているし、交通関係を示す小さなアフリカは皮膚を剝いで毛細血管をすっかりあらわにした傷ましい頭だ。それらはともに、なまなましく暴力的な変死

の印象をよびおこす。≫

この部分に関しては、すでに蓮実重彦による指摘がある。氏は、「このアフリカの地図は、ここに始まろうとしている『作品』が頭蓋骨の物語として綴られるであろう濃密な予感を、あたりに波及させることになる」（注六）とし、作品の導入としての役割を右引用に与えている。この解釈は、十分に諒解されるものであるし、ファコヘールの描写についても同様の解釈を当てはめることで、一応の納得はいく。しかし、それはそれとして認めたうえで、なお問題は残っているのである。子供の障害を負った頭蓋骨のメタファーを仕掛けておくとして、それがなぜアフリカのイボイノシシやアフリカ地図というように、いずれもアフリカに通じるものとなっているのか。問題は、それである。

鳥は、医者に子供を衰弱死させるように依頼した翌日、入院している妻のもとを訪れている。そこで鳥は、妻から、「あなたは自分を犠牲にしても赤んぼうのために責任をとってくれるタイプ？」、「あなたは、責任を重んじる、勇敢なタイプ？」と問われる。この問いに対し、鳥はつぎのように自己を診断している。

≪おれが戦争に行ったことのある人間なら、自分が勇敢なタイプかそうでないか、はっきりした答をもっているんだが、というようなことを鳥はたびたび考えてきたものだった。喧嘩のまえにも、受験のまえにも考えたし、また結婚のまえにだって考えてみたものだ。そしていつも自分がそれについて確たる答をもっていないことを残念に感じた。アフリカの反・日常生活的な風土で自分を験してみたいと希ってきたのも、それがかれ専用のひとつの戦争でありうるかもしれないと思われたからだった。しかしいま、鳥は戦争を考えあわす必要も、アフリカへ旅だつ必要もなしに、自分が信頼されるに足りない、卑怯なタイプであることを知っているという気がした。≫

ここでは、戦争とアフリカが、「自分が勇敢なタイプかそうでないか」を判断しうる場として、等価の関係に置かれている。ところが、鳥は、戦争にもアフリカにも行っていないにもかかわらず、すでにこの時点で、自分が勇敢ではなく「卑怯なタイプ」であるという答えを出しているのである。それは、いまの鳥が、自分の子供が衰弱死してくれることをただ待っている、すなわち子供から逃げ出しているからにほかならない。鳥はいま、自分の子供によって「勇敢なタイプかそうでないか」を験されているのである。したがって、アフリカと子供のアナロジーも、それらがともに鳥が勇敢であるかどうかを験す性格を帯びている点に求められよう。

障害を持った子供の誕生によって鳥が立たされた場は、もはや、「安穏で慢性的に欲求不満な日常生活」などではない。日常生活の彼方にアフリカを夢見るまでもなく、鳥自身に切実に関わってくる問題は、鳥にとってもっとも身近な家族の中に生じたからである。比喩的にいえば、日常生活そのものの中にこそ、アフリカはあったのである。鳥は、たびたび子供のことを「怪物」と叫び、それは最終章まで変わることはない。怪物たる子供は、鳥がアフリカに夢想していたものよりも、はるかに荒々しく鳥を打ちのめし、それゆえ、鳥の、子供からの逃避が始まるのである。

三

鳥と火見子の関係を考察するまえに、火見子の夫の自殺について触れておきたい。火見子の生き方の基底にあるものが、まさにそのこと

であると考えられるからである。

火見子の夫は、結婚一年後に自殺している。その原因は、夫が「この現実世界にいささかの権利もない」と感じたことにあるが、それが何に起因するものなのか、より具体的に把握するために、以下、情報を整理してみる。

まず、最初の手掛かりは、「鳥(バード)は火見子のことを常軌を逸脱した性的冒険家タイプだとする、おおっぴらな噂を聞いていた。それを彼女の夫の自殺とむすびつける噂さえも。」という箇所である。不確かな表現ながら、ここから火見子に纏わる性的事象と夫の自殺とのあいだにラインを一応引くことができる。これに類する確かな情報として、火見子はかつて一度、誰かから性的に嫌悪され、「おなかを褐色のウィスキーと黄色の胃液だらけに」されるような「ひどいめにあった」事実もあげられている。

また、鳥(バード)との会話において、火見子は、「あなたは自分がこうむったもっとも恐しい感情とおなじほどの恐怖を、他人の頭に植えつけたことがあると思う?」と問うた後、「考えてみてわかる種類のことじゃないかもしれないわ」、「あなたはまだそうしたことがないのよ」と、いっている。この口振りは、火見子自身が、実際に「そうしたこと」を経験したことを窺わせる。

これも同じく鳥(バード)との会話の中からであるが、火見子は、夫の自殺に話が及んだとき、「もし、あなたまでがこの寝室で首をくくることになれば、わたしは自分を魔女みたいに感じると思うわ」と、いっている。ここでの「魔女」という表現から、火見子の、夫にたいするある負い目を読み取ることができる。

以上列挙した点に、火見子が結婚以前から同性とも性的関係にあった事実を付け加えてみれば、火見子が同性と性的関係にあることを知った夫は、それを嫌悪すると同時に、夫としての、自己の現実における権利の喪失に恐怖したがために自殺したと推測される。

ところで、『個人的な体験』の一年三カ月前に発表された『性的人間』の、Jとその先妻の関係において、作者は、先妻を自殺させており、その原因を、Jが同性愛者であった点に求めている。つまり、Jと先妻を逆転させた図式が、火見子と夫の関係に受け継がれていることになる。

それはともかく、夫の自殺が火見子の行状に起因するものであることは、ほぼ間違いない。では、当の火見子は、夫の自殺をいかに受けとめているのであろうか。

火見子が、昼のあいだじゅう暗い部屋の中で耽っている瞑想は、「多元的宇宙」と呼ばれるものについてである。その内容を、以下に要約する。

自己がいま生きている「現実世界」が、ここに一つある。そこに辿り着くまでに、自己は様ざまな選択を行っている。かりにAとBの選択肢があるとき、Aを選べば、それが「現実世界」における自己である。しかし、選ばれなかったBの方の自己が消滅するわけではない。Bの生を生きている自己は、「現実世界」とは異なる宇宙に存在している。この選択を繰り返すことで、多くの次元の宇宙に自己が生じる。

この論を、火見子は夫との関係に用いて、「このわたしは、夫が死んでしまう側の宇宙に残されたけれども、夫が自殺しないで生きつづける向うがわの宇宙には、もうひとりのわたしがかれと一緒に暮して

いるんだわ」と、いっている。この、火見子の想定を、鳥(バード)は、夫の「死をとりかえしのつかない決定的なものでなくするため」の「心理的な詐術」であると批判する。この発言に、火見子は、「眼のまわりのニビ色の皮膚を醜いほど急速に紅潮させて」、「すくなくともわたしはこちら側の宇宙での責任を回避していはしないわ」と、反駁している。ところが、火見子は、その直後、ふたたび鳥(バード)から同様の批判を受けると、「それはそのとおりかもしれないわ」と、「たちまち自分の多元的宇宙論に興味を失ってしまったとでもいうように索然として」いっており、多元的宇宙論が夫の死を曖昧にするためのトリックであることを認めるのである。

夫の死に責任をとらねばならない、しかし一方でそれを忘れたい。自己が原因である夫の自殺にたいし、火見子は、そういう矛盾した意識を抱え込んだ状態にある。

四

1

それではつぎに、火見子のこうした意識が、火見子の行動にいかに反映しているのか見てゆくことにする。それは同時に、鳥(バード)と火見子の関係を問うことでもある。

両者の関係で、焦点を当てて描かれているのは、性的なそれである。鳥(バード)は、障害を持った子供が誕生したために、子供の生まれうるような性交渉を恐れるようになる。それが鳥(バード)の「性的恐怖心」である。そのことを火見子に打ち明けた直後の両者の性交渉は、鳥(バード)がそうした恐怖を抱かずにすむような仕方でおこなわれる。

≪……はじめ鳥(バード)は火見子のことを気づかっていた。しかし度たび失敗をくりかえすうち鳥(バード)は滑稽な小さな音とおかしな匂いに嘲弄されているような気がして反撥し、しだいにエゴイスティクな自己執着よりほかになにも感じなくなった。――(中略)――おれは、ありとある最も卑劣なことをやってのけられる人間だ。おれは恥のかたまりだ、おれのペニスがいまふれている熱いかたまりこそがおれだ、と鳥(バード)は考え、そして眼も昏むほど激甚なオルガスムにおそわれた。

鳥(バード)が快楽に痙攣するたびに火見子は鋭い苦痛の悲鳴をあげた。――――(中略)――

オルガスムが過ぎさったとき、鳥(バード)は自分が火見子に本当に最悪のことをしてしまったと感じ、化石したような気分だった。これほどにも非人間的に結びついたあと再び火見子と自分のあいだに、人間的な関係が回復しうるだろうか？　と鳥(バード)は疑った。鳥(バード)はじっと体をうつぶせて荒い息をつきこのまま消滅してしまいたいと考えた。ところがその鳥(バード)に日常的な静謐にみちた穏やかな声で、火見子がささやきかけてくれるのだった。

「鳥(バード)、そのまま手をふれないで浴室にきてちょうだい、わたしが、すっかりすませてあげるから」

鳥(バード)は深い驚きとともに救助され、解放された。≫

ここでの性交渉は、鳥(バード)にとっては「快楽」で火見子にとっては「苦痛」であったと、その対照性において、まずは捉えることができる。

鳥(バード)の「快楽」は、パートナーの精神や肉体の事情をいっさい無視した「エゴイスティクな自己執着」によってもたらされたものである。しかし、それだけではない。「激甚なオルガスムにおそわれた」とき、鳥(バード)は「おれは、ありとあるもっとも卑劣なことをやってのけられる

人間だ」、「恥のかたまりだ」と考えてもいるので、自己に執着する鳥（バード）と背中合わせに、そういう自己を断罪する鳥（バード）もいるのである。つまり、鳥（バード）は、自己に執着することで肉体的な「快楽」を得ることはできたが、その内面では罪意識という「不快」を抱えているといえる。行為ののち、鳥（バード）は火見子にたいしすまなく思っているが、それは罪の意識が全面的に表出したものと解せよう。

さて、一方の火見子がこの性交渉を行った動機は、「わたしはいま、あなたのためになにかひとつのことをしてあげたいとおもっているだけ」だというものである。この火見子の動機は、鳥（バード）とはまったく逆なもので、火見子ははじめから自己執着を捨てたところに立っている。火見子に執着があるとすれば、それはやはり自殺した夫のことであろう。火見子が自己を捨て、性的な苦痛をあえて受け入れるのは、鳥（バード）のためであると同時に、それが性的関係の亀裂から夫を自殺にまで追い込んだ自己の罪の償いでもあるからだろう。苦痛を経たのち、火見子は「日常的な静謐にみちた穏やかな声」で鳥（バード）に囁きかける寛容さを持っているが、この寛容な態度も罪を自覚することによってはじめて可能になったと考えられる。したがって、この場面における火見子には、もっぱら死んだ夫にたいする責任を引き受ける姿勢が窺える。

鳥（バード）の罪は、火見子の寛容によって赦され、やがて鳥（バード）は「性的恐怖心」を克服する。火見子は、自己を罪人と意識するがゆえに、鳥（バード）を罪から救う女神ともなりうるのである。

ところが、つぎに引用する、二人の最後の性交渉は、いま見たそれと様相を異にするものである。

≪真夜中、蒸し暑い暗闇のなかで、いかにも怠けものみたいにおたがいにもっとも負担のすくない姿勢をとって、鳥（バード）たちは、一時間も性交をつづけていた。――（中略）――鳥（バード）たちの性交にはすでに日常生活的な静謐と秩序の感覚が根づいていて、鳥（バード）は火見子ともう百年も性交をつづけてきたような気がした。鳥（バード）にとって、いまや火見子の性器は、単純で確実で、そこにはどのように微細な恐怖の胚芽もひそんでいない。それは≪なにやらわけのわからぬもの≫でなく、柔らかな合成樹脂でつくったポケットのように単純な物そのものだ。そこから妊怪があらわれてかれを追いつめるというようなことはありえないだろう。鳥（バード）は深く安堵していた。おそらくそれは火見子が、徹底してあからさまに快楽のみをめざすものとしてかれらの性交を限定したからだ。≫

「おたがいにもっとも負担のすくない姿勢をとって」行われるここでの性交渉には、さきの性交渉にみられた「快楽」（鳥（バード））と「苦痛」（火見子）の対照性は、すでに失われている。ここにあるのは、「日常生活的な静謐と秩序の感覚」の共有である。

その感覚を、鳥（バード）の側に即して具体化すれば、それは、「火見子ともう百年も性交をつづけてきたような」気分といいあらわせるだろう。これは、性的側面に限定されるものとはいえ、鳥（バード）が火見子の領域に深く根をおろしていることを意味する。いまの鳥（バード）にとって、火見子とのつながりのほうが、一方に残してきた「日常生活」よりも、よりそれらしくなってきているのである。

さて、一方の火見子の場合、さきにみた性交渉において、火見子の目指していたものは、夫にたいする罪の償いであった。ところが、ここでの性交渉は、「徹底してあからさまに快楽のみをめざすものとし

て」あり、ここに夫の影を見ることはできない。

火見子の変化は、こればかりではない。

いまみた性交渉の行われた当日、火見子を訪ねてきた義父は、こういっている。

≪「これは、失礼」と火見子の義父はいった。「しかし火見子ちゃんが、こんなに生き生きしているのは、息子が死んでから、はじめてなので、そういうことを考えたんですよ。怒らないでください。」≫

変化する以前の火見子は、自己執着を捨てることによって、すなわち、みずからも死のうちにある者としてふるまうことによって、自殺した夫にたいする罪を償おうとしていた、しかし、いま、火見子は、夫にたいする罪を忘れることで、「生き生き」とした自己に向かいつつある。火見子をそうした変化に向かわせる蓋然性が、すでに火見子自身の内に秘められていたものであることは、まえに確認したとおりである。その火見子に作用し、蓋然性の蓋を開いたのが、鳥(バード)である。その意味で、鳥(バード)が火見子を必要としたばかりでなく、また火見子も鳥(バード)を必要としていたといえるだろう。

2

つぎに、いまみた性交渉以降の火見子について、考察を行う。

夜、鳥(バード)の子供の入院先の病院から、火見子のもとにいる鳥(バード)に電話がかかる。それは、鳥(バード)の子供のことで遅くまで忙しかったことと、明日、鳥(バード)に病院へ来てほしい旨を、告げるものであった。鳥(バード)は、それを受けて、子供は衰弱死したと、一応考え、そのまま眠りにつく。そこで、ひとり起きている火見子は、つぎのように描かれている。

≪火見子は痛みに涙を流しながら暗がりをすかして、鳥(バード)の不自然に縮こまった苦しげな寝姿を眺めていた。火見子は、病院からの電話を鳥(バード)が誤解したのではないかと疑っていた。赤んぼうは死んだのではなく、定量のミルクと回復への道に戻されたのではないか？病院へこいというのは、赤んぼうの手術の相談のためなのではないか？火見子は檻のオランウータンのように窮屈に体をおりまげウィスキーの匂いの燃えたような息をはいて眠っている男友達を、滑稽かつ憐れに感じた。しかし、この眠りは明日の大騒ぎのまえの小休止にはなるだろう。火見子はベッドから降りたち、鳥(バード)の腕と足をひっぱってベッドいっぱいにのびのびと眠ることができるようにたすけてやった。鳥(バード)は魔法にかかって眠る大男のように重くはあったが思いのままだった。それから火見子はギリシアの賢人のスタイルでシーツに裸の体をくるむと居間へ出て行った。彼女は夜明けまでアフリカの地図を眺めているつもりだった。≫

まず、注目されるのは、火見子が、鳥(バード)の子供は衰弱死したのではなく、回復に向かっているのではないかと、すでに、この時点で、疑念をいだいている点である。そして、事実は、火見子の予想どおりであり、鳥(バード)がそれを知るのは、翌日、病院へ行ったときである。火見子は、事実を知らされ途方に暮れている鳥(バード)に、「もし、あなたにどのような計画もないなら」と、自分の友達の医者に子供を殺してもらう案をもちかける。これは、火見子が自発的に子殺しを企てる、その契機を記したものと受け取られる。火見子によるこの企ては、火見子が「夜明けまでアフリカ地図をながめているつもり」であったことと、無縁ではない。

火見子が、このときアフリカに夢中になったことは、翌日、火見子

自身の口から明かにされる。しかし、火見子は突然アフリカに夢中になったわけではない。その伏線は、義父の訪問する場面に、すでに張られている。そこで、義父は、鳥にたいし、火見子と共にアフリカ旅行をしてはどうかと提案し、それについて、火見子は、「そうね、悪くないわね」「アフリカ旅行をしている間は、赤ちゃんの不幸について忘れることができるわよ、鳥。そしてわたしは自殺した夫のことを忘れることができるわ」と答えている。火見子にとって、アフリカ行が、夫を忘れるために、まず願われていることが知られる。これに関連して、つぎのことも考え合わせたい。子供を火見子の知り合いの医者のところへ運ぶまえに、火見子は、「いまではわたしたちは、新しくアフリカの実用地図をなかだちにして結びついているわ、鳥。わたしたちはもう単純に性的なだけの場所からもっと高い場所へ跳びあがったのよ」といっている。鳥とむすばれることによって、火見子が夫から逃れようとしていたことは、さきに述べたとおりである。しかしそれは、火見子にとって、性的側面に限られた逃避であったのであり、したがって、いまの火見子は、その限定を取り払った関係を鳥とのあいだに築くことで、より全面的な逃避へ向かおうとしている。それを可能ならしめる場として、アフリカは想定されている。そして、それが実現されるためには、まず、鳥の子供を殺し、鳥を自由の身にしてやる必要があるのである。

ところで、すでに、野口武彦によって指摘されているように、鳥の視点で綴られる本作品中、右の引用箇所のみ、その視点が火見子に移っている（注七）。自己の性的な快楽を追求しはじめたとはいえ、火見子の、これまでの生の様態は、総じて、子供から逃れて来る鳥をやさしく包み込んでやる、そういう受身のものであっただろう。しかし、いまや火見子は、夫にたいする罪から逃がれるために、子殺しやアフリカ行へ、率先して鳥を導く能動性を、発揮している。視点の移動は、そうした、火見子の主体の立ち現れを物語るものであろう。

換言すれば、かつて、鳥を癒す女神であった火見子は、罪を放擲すると同時にその座を降り、いまでは、鳥と対等な一個の女性として、新たなる生を生きつつあるのである。

3

それでは、火見子に導かれる鳥は、その行く手にあるアフリカと子殺しを、いかに受けとめているのであろうか。

鳥は、火見子からアフリカ行に誘われたとき、火見子とはまったく反対に、「熱情をそそらないアフリカしかいまは頭に浮ばない。」

≪かれの内部にそのようにアフリカが輝きを喪ったのは、かれがアフリカに最初の情熱をいだいた少年時以来はじめてだった。灰色のサハラ砂漠に佇む索漠とした自由な男、かれは東経一四〇度のトンボの形をした島で赤んぼうを殺し逃亡してきたのだが、アフリカじゅう歩きまわってイボイノシシはおろか地鼠いっぴきつかまえられなくてサハラ砂漠で茫然としている。≫

一節での考察を参考にすれば、障害を持った子供という「怪物」を回避して、アフリカに、自己の勇気を試みるべく旅立つ不毛を、鳥は、この箇所において、よく承知するにいたっていると解せる。

つぎに、子殺しについてである。火見子が知り合いの医者の件を鳥に提案したさい、二人は、以下のような会話をしている。

≪「かれに頼むことは、それこそ、わたしたちの」と火見子は異様

なほどゆっくりした口調でいった。「手を汚して、赤ちゃんを殺すことよ、鳥」

「わたしたちの手じゃない、ぼくの手を汚して、赤んぼうを殺すことさ」と鳥はいった。そして鳥は、すくなくとも、ひとつの欺瞞から、いまおれは自分を解放したわけだ、と考えた。しかし喜びがあるわけではない。ゆううつな地下牢への階段を一段だけ、降りた感じだった。

「やはりわたしたちの手なのよ、鳥」と火見子はいった。≫

鳥の子供を殺すこと、それは、火見子にとって、夫にたいする罪から逃れるために企まれた第二の罪と、呼ぶことができる。火見子が、「わたしたちの手」にこだわるのは、その罪にたいする自己の責任を引き受けようとする、気持ちの現れであろう。

一方、鳥のほうは、「ぼくの手」であると主張することによって、子供にたいし、責任をとろうとしている。しかし、見落としてならないのは、そう主張することが、「ひとつの欺瞞」からの自己解放であり、「地下牢への階段を一段だけ」降りる行為であると、鳥が感じている点である。ここから、鳥にとって、直接には医者の手によって殺してもらうこの企図は、子供の死にたいする己が責任を、十全に果すものではないと知れる。したがって、鳥からみた場合、火見子の責任の取り方も、逃避の域を越え出るものではないのである。

4

鳥は、子供を育てる決心をする直前、「おれは赤んぼうの怪物から、恥しらずなことを無数につみかさねて逃れながら、いったいなにをまもろうとしたのか？いったいどのようなおれ自身をまもりぬくべく試みたのか？」と自問し、その答えを、「ゼロ」としている。ところで、鳥の「自分が勇敢なタイプかそうでないか」を験したいという欲求は、自己の存在意義をしっかりつかみたいそれであると、いいかえられよう。いま、鳥は、子供によって、それを験されているのであるから、子供から逃げ出せば、それは同時に、鳥の自己喪失を意味するのである。鳥が、子供からの逃避を最終的に拒んだ理由がここにある。しかし、それは、あくまで逃避を拒む理由であって、鳥が子供を育てる決心をする理由とは、直接一致しない。なぜなら、鳥は、「赤んぼうの怪物から逃げだすかわりに、正面から立ちむかう欺瞞なしの方法は、自分の手で直接に縊り殺すか、あるいはかれをひきうけて育ててゆくかの、ふたつしかない」と考えており、いまだ二者択一の余地を残しているからである。鳥が後者を選んだ最大の理由は、火見子との関係をおいてほかにない。

鳥と火見子の基本的な相違は、鳥が罪を犯す以前の人物であるのにたいし、火見子は、すでに罪を背負った人物となっている点である。とすれば、罪びと火見子は、鳥が最終的に選ばなかった道を歩む人物であり、その意味で、火見子は、鳥に選ばれることのなかった、幻の鳥でもある。つまり、この作品は、二人の人間の生を描きながら、一人の人間の現在と、選ばれない未来を、同時に映し出しているのであり、これはまさしく火見子のいう多元的宇宙の構造である。鳥は、子供を殺して罪びととなるか、それとも子供を引き受けるかの岐路にあって、火見子を見ながら、そこに、罪びととなった幻の自己をも見ていたのである。そこで、幻の鳥たる火見子の描いた生の軌跡は、自殺した夫にたいする罪から逃れ、また、そのために、子供にたいする

罪からも逃れようとする、いわば罪からの逃避の反復であった。それは、いったん罪を犯した人間は、自己欺瞞を重ねる以外に、その罪を忘れることはできず、新たな生を生きることもできない悲劇を物語っている。鳥（バード）の選択肢の一方が、こうした悲劇を示す以上、鳥は、残った選択肢、すなわち子供を引き受け、育ててゆく道を選ぶほかない。

五

『個人的な体験』に到るまでの、大江の作品群を俯瞰してみた場合、『芽むしり仔撃ち』がひとつの分岐点にあたることはよく知られている。いま、『芽むしり仔撃ち』以降の作品に眼をむければ、そこには、おおくの作品に類似した性格を見出すことができる。たとえば、『われらの時代』の南靖男は、日本の若者に希望はないと考えており、フランスへ脱出することを夢見るが、結局はそれも果さず、揚句の果てに、「おれにとって唯一の《行動》が自殺だ！」との認識に到る。『ここより他の場所』の青年は、老人の、船に乗って「ここより他の場所」へ行こうとの誘いをいったん断るが、青年の情人が、青年の子供を欲しており、結婚の意志があるのを知って、老人の誘いを断ったことを痛切に後悔する。『叫び声』の「僕」は、日本から解放されるためにヨーロッパへ旅立つが、そこでも「僕」は、満足することなく、結局、「われら安住するところ」「それはどこにもない」と考える。『日常生活の冒険』の「ぼく」は、いったんヨーロッパへ赴いて、そこで失望して日本に帰り、そしてふたたび、「ぼくの日常生活のすべての係累をなげうち気違いのように夢中になってアフリカ行きのジェット機に乗るだろう」と考える。これらの作品は、いずれも、いま自己の置かれている場と、そうでない場という、二極対立の設定から成り立っている。そうでない場に、希望を見出しうるか否かは、個々の人物によって、多少の差異が認められるけれども、いまある場が、それら人物にとって、不毛なものであることに変わりはない。子供誕生以前の、アフリカを夢見る鳥（バード）は、この図式の延長線上にある。

しかし、『個人的な体験』は、それにとどまらない。障害を持った子供が誕生することによって鳥（バード）の立たされた場は、不毛なものではなく、その場を逃れては、もはやどんな自己存在の意義もありえず、つまり自己が「ゼロ」となる、そのような場としてある、ここに、これまでの作品との大きな相違を認めることができ、そして、この質的変化は、いうまでもなく、大江本人に障害を持つ子供が誕生した、その一事実に基づくものであろう。

しかし、だからといって、作品世界内の鳥（バード）と、書き手である大江を、直截に結びつけるのは早計であろう。そこで、両者の距離を測定するために、一九八七年に、「信仰を持たない者の祈り」と題して行われた大江の講演を参考にしたい。そのなかで、大江は、障害を持って生まれた子供をいかに受けとめたかについて、つぎのように語っている。

《若いお医者さんから、この子供はこのままでいると死ぬ、救うためには手術をしなきゃいけない、ところが手術をすると、やはり障害が残るにきまっている、だから手術をしろとお医者様に勧められても、君は断ったほうがいいんじゃないかということを、言われたことがありました。僕自身は、小説にそのことを書いて、その子供を殺してしまおうと思っている父親のことを書きましたけれども、僕自身は、殺そうと思っていたということは、ないように思います。――（中略）――しかし、自然に死ぬんだったら、そのほうがいいかもしれないと

思っていたことは、確実なんです。そして、毎日、特児室のとこへ通って、子供を見にゆくんですけれど、それは、今日亡くなっているかという風な、ある期待があってですね、行っていたように思います。そして、毎日、見に行っていた。ところが、――（中略）――一カ月くらいたったある日のこと、それ（＝真っ赤になって太って頑張っている子供・筆者注）を見ていましたらですね、なにか自分の中に起こったような気がするんです。そして、自分も真っ赤になったような気がしますね、顔中が。そして、思ったことは、この子供が、このまま死んでいくんだったら、自分は二十八年間生きてきたけれども、そのこと自体にも意味がないということを、思ったわけです、論理っていうものはないんですけれども。そして、先生のところに伺いました。――（中略）――そして、手術をしていただくことにしたんです。≫

（注八）

鳥（バード）が、子供を殺そうと思って医者に頼み、子供の死に何らかの働き掛けをしたことと、大江が、子供の自然死を期待していたこととには、能動／受動の相違がみられる。ところで、大江は、『ヒロシマ・ノート』のなかで、自然死を期待する自己の内部を、「ガラス箱のなかの自分の息子との相関においておちこみつつある一種の神経症の種子、頽廃の根」と表現しており、その内部にヤスリをかけたいともいっている。つまり、大江は、直接子供の死に働きかけないとはいえ、自己の内部に否定的要素を嗅ぎ取っていることは確かである。また、菊比古の酒場を出たとき、鳥（バード）は、「もし、おれがいま赤んぼうを救いだすまえに事故死すれば、おれのこれまでの二十七年の生活はすべて無意味になってしまう」と考えているが、それは、大江その人の内面と、ほぼ一致する。こう観てくると、多少の相違はあれ、鳥（バード）が、大江を土台に形象されたであろうことは、疑いを入れない。

大江は、江藤淳との対談のなかで、「この小説においてぼくに必要なのは實存的な倫理、現實を正面から引き受けるか引き受けないかという倫理で」（注九）あるといっているが、この言を待つまでもなく、『個人的な体験』の根幹のひとつをなしているのは、実存主義、それもサルトルにおける実存主義である。子供を引き受けるか引き受けないかという選択の問題にせよ、その選択によって自己が「ゼロ」となるか、それとも自己を回復するかという自己欺瞞の問題にせよ、すべてそこから発している。しかし、そもそも大江の作家としての出発が、「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えること」（注十）にあった点を考えれば、そのこと自体、さして驚くことではない。ここで大切なことは、個々の作品が、実存主義の影響を受けているとして、それがいかに実存を生きられているか、そのリアリティーの質である。『個人的な体験』前の作品に顕著な、二極対立の構造についてはさきに述べた。そこで、登場人物は、選択が課される。しかし、その選択は、日本か海外かという大枠なもので、その因って来るところは、日本の置かれた状況を不毛として、けっして希望を見出しうることのない大江の、観念的な認識である。その観念性ゆえ、そこでの実存は、脆弱なものとなるだろう。『個人的な体験』のなかにも、「フルシチョフの核実験再開」といった、時代状況にかかわる言葉はみえる。しかし、鳥（バード）は、それに反応することができない、文字通り「個人的な体験」を体験する者としてある。したがって、鳥（バード）が、選択し、自己欺瞞を克服してゆく過程は、真に実存を生きるものであっ

たと、いえるだろう。大江は、大江個人の問題を、ここによく掘り下げて追求している。これと時期を同じくして、大江は、『ヒロシマ・ノート』を書き進める。広島の不幸、ひいては核時代の不幸をいかに乗り越えてゆくか、大江が、それに、自己と無縁ではない問題として取り組むことは、自己の不幸を徹底して検証する姿勢があって、はじめて可能になったと考えられる。

この実存の問題とともに、『個人的な体験』の根幹をなしているのが、多元的宇宙である。実存主義においては、選び取る行為そのものが問題とされる。選択は、たえずわれわれに課せられているというその考え方を、時間軸に照らしてみると、それは、未来を指向しているといえる。これとは逆に、多元的宇宙論においては、過去に行われた選択および選ばれなかった自己が問題とされる。こうした考えを、大江がするようになった源には、やはり障害を持った子供の誕生があるだろう。簡潔に述べれば、大江は、子供の死を一時なりとも期待したのが、ほかならぬ自己であったことを、忘れてはいないし、許していない。そうした自己の内面に潜む暗がりを形象化したのが、罪びと火見子であると考えられる。鳥（バード）は、火見子と別れ、子供を引き受けた。では、大江は、自己の内にある火見子的なるものに解決がつき、罪の感覚を癒されたであろうか。

≪鳥（バード）はちょっと眼をつむり、数日前アフリカのザンジバル行きの貨物船に乗りこんだ火見子の脇の、あの少年じみた男のかわりに、赤んぼうを殺した鳥（バード）自身が乗りこんでいる、充分に誘惑的な地獄の眺めをえがいてみた。火見子のいわゆるもうひとつの別の宇宙ではそのような現実が展開しているわけなのかもしれない。それから鳥（バード）は、かれ自身の選んだ、こちらがわの宇宙の問題にたちかえるべく、眼をひらいてこういった。≫

大江が、障害を持った子供と共生する道に立っていることは、もはや動かない。しかし、大江は、眼を閉じて、「もうひとつ別の宇宙」を見ている。しかも、それは、いまだ「充分に誘惑的な地獄の眺め」なのである。大江は、選ばれなかった自己、罪びととしての自己を、いまだ葬ってはいないのである。

大江の、ここに見られる多元的な自己把握は、これ以後の作品に通底してゆく。それは、自己の拡散を意味するのではない。あるときには時を遡り、あるときには空間を移動し、またあるときには他者の生を生き、そのようにして自己を多元的に見つめながら、やがては、子供と共生している、いま、ここにおける自己に収斂してゆく。大江は、想像力を強調する作家であるが、この語が、初めて意識的に重要視して用いられたのは、『個人的な体験』の約二年後に発表されたエッセイ『記憶と想像力』（注十一）においてである。想像力の有効性を一元化するつもりはないが、この時期を考慮に入れれば、多元的に自己を把握する方法として、大江は想像力にたいしても自覚的になっていったと考えられる。

『個人的な体験』につぐ小説『万延元年のフットボール』は、そのエッセイの約半年後に発表が開始されている。そのなかの「僕」は、片眼を失っており、その見えざる眼は、「自分の内部の夜の森を見張る斥候」であるという。片眼で外部を見、もう一方で自己の内面の暗がりを見る、その必然性は、すでに『個人的な体験』によって示されていたのである。

（注）

一　「國文學・解釈と教材の研究」昭和五十八年六月号、學燈社。

二　「國文學・解釈と教材の研究」昭和六十二年七月臨時増刊号、學燈社。

三　デルチェフさんは、バルカン半島の、ある社会主義国から、公使館員として日本にわたってきており、鳥（バード）が属しているスラブ語研究会の講師を兼ねてもいる人物である。その公使館と研究会から失踪したデルチェフさんは、日本人の若い娘のアパートで同棲している。鳥（バード）は、職場復帰をうながすために、そのアパートを訪ねるが、そこでデルチェフさんは、この失踪が政治的な理由によるものではなく、「女友達が、わたしに居てもらいたがってい」るからという、もっぱら「女友達の感情的理由」によるもので、自分から公使館に戻る気はないと語る。また、そのことによって生じる仕事上の責任をとる用意のある旨を告げ、鳥（バード）の、「これからぼくが報告すれば、すぐにでも公使館の人たちが、あなたをつれ戻しにきますよ」との言にたいし、デルチェフさんは、「わたしの意志に反してつれ戻されるのですから、仕方ありません。女友達はそれを理解するでしょう」といってもいる。つまり、デルチェフさんは、職場よりも女友達の感情を受け入れることを、その意志において選んでいるのであり、その行為は、責任逃避とは根本的に異なるものである。さらに、デルチェフさんは、子供の衰弱死を待っていることを打ち明けた鳥（バード）にたいし、カフカの言葉を引用して、「子供にたいして親のできることは、やってくる赤んぼうを迎えてやることだけです」と、「猛だけしいほど男っぽく剽悍な表情をみなぎらせて」いっている。この言葉のもつ説得力は、自己の責任において選択する、デルチェフさん自身の生き方に支えられている。それを聞いた鳥（バード）は、「自分にはデルチェフさんにこたえるいかなる言葉もないと感じ」、「逃亡する者のように駈け」て、その場を去るが、それは、デルチェフさんの言葉や生き方の総体に接することで、逆に、子供にたいする責任を逃れようとしている自己の姿が浮き彫りになったためだろう。デルチェフさんは、鳥（バード）が、いまある自己を見つめ直す、一つの契機となっているのである。

同性愛者の菊比古もまた、鳥（バード）の自覚をうながす点で、デルチェフさんと同様の役割を担っている。まず、菊比古は、「ホモ・セクシュアルの人間とは、同性愛を実行することを選んだ人間だ、というでしょう？わたし自身がそれを選んだのだから、責任は他の誰にもないよ」と、鳥（バード）や火見子にいっており、これは、デルチェフさんとほぼ一致する、生き方の認識といってよいだろう。また、菊比古は、かつて鳥（バード）が不良少年であった頃の仲間でもある。そこで菊比古は、「二十歳の鳥（バード）は、あらゆる種類の恐怖から自由な男で」あったのに、いまの「鳥（バード）はなにかを怖がっていて、それから逃げだそうとしている感じだ」と、的を射た発言をする。つまり、鳥（バード）は、責任を引き受ける菊比古の姿勢を、そして恐怖心から自由であったかつての鳥（バード）を、さらには、恐怖に脅えて逃げ出しそうないまの鳥（バード）その人の姿を、菊比古によって示されたのである。鳥（バード）の転換が行われたのは、その後まもなくのことである。

四　『大江健三郎の世界』昭和四十二年、講談社。

五　『大江健三郎論』昭和四十八年、立風書房。
六　『大江健三郎論』昭和五十五年、青土社。
七　『吠え声・叫び声・沈黙―大江健三郎の世界―』昭和四十六年、新潮社。
八　新潮カセット講演『時代と小説・信仰を持たない者の祈り』（昭和六十三年、新潮社）に基づき、筆者が文章化した。
九　「群像」昭和四十年三月号、講談社。
十　短編集『死者の奢り』後記昭和三十三年。
十一「展望」昭和四十一年十月号。